

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370943

研究課題名(和文)北西アフリカ圏域におけるベルベル系宗教知識人による翻訳活動をめぐる人類学的研究

研究課題名(英文)An anthropological study of the translating activities of Berber religious scholars in Northwestern Africa

研究代表者

齋藤 剛 (Saito, Tsuyoshi)

神戸大学・国際文化学研究所・准教授

研究者番号：90508912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、北西アフリカ圏域におけるベルベル系宗教知識人による翻訳活動を人類学的観点から捉える研究である。本研究では、アラビア語で編纂された宗教諸学のテキストを韻律を伴ったベルベル語の宗教詩に翻訳することで、ベルベル社会の再イスラーム化に貢献したベルベル系宗教知識人によるテキスト生産と宗教詩の受容、流通を通じたイスラームのローカル化のプロセスの一端を明らかにすることに努めた。

研究成果の概要(英文)： This study elucidates the local production of the Islamic knowledge of Berber religious scholars. It focuses especially on the activities of translating Arabic religious texts into the Berber language.

The Berbers, whose homelands are scattered in North and West Africa, are people who progressively converted to Islam after its arrival in the seventh century. In the Islamic medieval centuries, they founded Islamic dynasties such as al-Murabit, al-Muwahhid, and others that served to Islamize North Africa and beyond. In parallel with such political activities, Berber religious scholars not only embarked on translating various Arabic religious texts into the Berber language, but also produced religious poetry in Berber in order to localize Islamic knowledge among ordinary people. This study focuses especially on the production of religious texts from the pre-colonial era to the contemporary period.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 イスラーム 北西アフリカ圏域 ベルベル

1. 研究開始当初の背景

「北西アフリカ圏域」に広く分散して暮らすベルベル人をめぐる近年の人類学的研究は、大きく二つの潮流から成り立っている。

第一の研究潮流は、1990年代以降になってモロッコなどで顕在化するに至った「アマズィグ運動」と呼ばれる先住民運動に関するものである。

ベルベル人の中から生まれて来たアマズィグ運動は、ベルベルに代えてアマズィグという呼称を自称として選好し、とくに都市部において、世俗主義的思想の影響を受けた人々を主体として展開している。この運動は、北アフリカ諸国独立以降、ベルベル/アマズィグ人の諸権利が国家によって簞奪されてきたとみなし、権利回復を希求するものである。また、アマズィグ/ベルベル人の諸権利獲得のために運動は、アラブ人とアマズィグ/ベルベル人を対立的に捉える民族観を強調する傾向がある。

以上のような特徴をもつアマズィグ運動について既存の研究は、フランスによる植民地支配期の民族政策の影響、北アフリカ諸国の独立以降の政治状況とベルベル/アマズィグ人の社会的・政治的位置づけ、フランスなど欧米諸国における移民社会の形成と北アフリカ諸国に拠点をおく NGO とのトランスナショナルなネットワークの形成、通信技術やメディアの革新との関連、1990年代以降の世界的な先住民運動の高まりとの関連をはじめとした多角的な視点から運動の動向とその形成の基盤、特質を明らかにしてきた。

既存の研究においては、アラブとベルベルを異なる民族として対立的に捉える運動主導者の理解に批判が加えられて来ている。しかしながら、それにも関わらず、一般のベルベル系住民の大多数がムスリム(イスラーム教徒)であり、異種混交的な社会・言語環境にあることは、既存の研究において等閑に付されてきた。さらに、ベルベル人の故郷と出稼ぎ先の都市を対比的に捉え、故郷はアラビア語、アラブ人の影響が少ない社会・言語環境にある空間として捉えるという理解が提示されてきた。

だが、このような理解は、異種混交的な言語・社会環境を生きる一般住民の生活実態に必ずしもそぐわないばかりでなく、アラビア語で編纂された宗教的テキストやイスラーム的知識の受容やベルベル系宗教知識人の活動の実態、彼らとベルベル系住民の関わりを等閑に付すことにも繋がる。

他方で、第二の潮流は、ベルベル人の口頭伝承およびベルベル系宗教知識人が残した文書史料への関心によって強く動機づけられており、口頭伝承や文字資料の収集と記録において研究を蓄積している。こうした研究の問題点としては、その研究関心が、口頭伝承の文字化、資料化に限定されているという

傾向を指摘できる。

2. 研究の目的

アマズィグ運動においては、アラブ人、アラビア語との対抗関係から、アマズィグ/ベルベル人を本質化して捉える傾向がある。そのため、ベルベル/アマズィグ系宗教知識人の翻訳・編纂活動を理解する上でも、アラブ的要素を可能な限り排除して、アマズィグ人の活動として理解をしようとする。

このような傾向に対し、先に記した二つの研究潮流は、そのような本質主義的な理解の問題点を乗り越えるものとはなっていない。

これに対して本研究は、アマズィグ運動においてしばしば提示されるアラブとベルベル/アマズィグを対立的に捉える固定的な民族観や、既存のベルベル/アマズィグ研究において等閑に付されて来た、現地社会でアラビア語の宗教的テキストのベルベル語への翻訳活動に従事した人々の活動を対象として、アラブ化とベルベル化を同時に進展させるような、異種混交的活動の実態を明らかにしようとするものである。

本研究は、北アフリカと西アフリカの間域を「北西アフリカ圏域」として捉え、同圏域におけるイスラーム化に大きな役割を果たして来たベルベル系宗教知識人による翻訳活動をはじめとした知の生産活動を人類学的に研究するものである。

本研究がとくに対象とするのは、モロッコ南西部を中心として活躍し、モロッコ北部からサハラ砂漠周辺部にまで影響を及ぼした宗教知識人の知識生産活動である。

3. 研究の方法

本研究では、インタビューや儀礼への参加などを含む現地調査に基づく資料の収集と分析、文献資料の収集と分析を基に進めた。

研究を進めるのにあたって、本研究では調査対象地域や調査対象を以下のように限定した。

ベルベル/アマズィグ人は、チュニジア、アルジェリア、モロッコなどをはじめとした北アフリカから、西アフリカにかけての広大な地域に分布している。その中でも本研究は、モロッコ南西部スース地方をとくに調査対象地域とした。

モロッコ南西部を故郷とするベルベル系宗教知識人を対象とするうえでは、とくに19世紀にモロッコ南西部の再イスラーム化に多大な貢献を果たしたダルカーウィー教団に関連する知識人達の翻訳活動を主たる対象とした。

以上のように対象地域、対象となる人々を限定したうえで、現地調査と資料収集を実施した。スース地方、イスラーム法学、スーフイー教団などに造詣が深いラフセン・ダイーフ氏(リヨン大学)、アガディーール大学のメ

フディー・サイディー氏などの協力を得つつ、研究を進めた。

4. 研究成果

本研究の成果としては、主に、以下の5点を挙げることができる。

(1) 地域概念の再検討、植民地遺産、アマズィグ運動

植民地支配期の民族政策、民族観が、今日のアマズィグ運動におけるアラブとベルベルノアマズィグを対立的に捉える民族観に継承されていること、アマズィグ運動における民族を対立的に捉える視点が、故郷を地理的に境界づけられた場と捉える発想にも繋がることを明らかにした。

その上で、個の集積として地域、社会、歴史を捉えようとする現地の知識人ムフタル・スースィーの構想に、アマズィグ運動や既存のベルベル研究における地域、民族の捉え方を乗り越えるための手掛かりを見出し、その可能性を探った。

(2) 翻訳活動、知の生産をめぐる

ベルベル系宗教知識人の翻訳、宗教的知識の生産活動については、19世紀後半にモロッコ南西部の再イスラーム化に多大な貢献を果たすと同時に、ベルベル語への翻訳活動に従事したスーフィー教団、ダルカーウィーヤにとくに焦点を定めて研究を進めた。研究において用いたのは、ダルカーウィー教団員たちが用いるベルベル語で記された宗教詩の手稿であり、その翻訳と韻律のあり方を検証した。

アラビア語における詩学の影響を受けた形で、ベルベル語の宗教詩は編纂されていることが明らかになった。このことは、アマズィグ運動の担い手が、ベルベル系宗教知識人たちの翻訳活動はベルベルノアマズィグ的な言語編纂活動であり、アラビア語の影響を減らすものであると理解しているのに対して、むしろ逆にアラビア語の詩法に合うようにベルベル語の詩歌が作成されているという側面があることを示唆している。

また、翻訳においてもアラビア語の語彙が多用されており、ベルベル語を母語とする住民がアラビア語に親しむための機会となるように配慮した翻訳がなされていることも明らかになった。

(3) 「近代人類学」黎明期の研究の再評価

本研究においては、植民地支配期の民族政策などが、グローバル化が進展する今日的状況においてアマズィグ運動に継承され、再生産されている状況を批判的に捉えるという視点から、ベルベル系宗教知識人の翻訳・知識生産活動を取り上げている。

このような意図を有すると同時に本研究では、植民地支配期の研究者が提示した研

究を再検討し、その理論的可能性を明らかにした。とくに注目をしたのは、アラブ人、ベルベル人のもとで20年以上にわたって調査を実施し、モロッコにおける宗教生活の諸相を明らかにした英国社会人類学の立役者エドワード・ウェスタマークの研究である。

ウェスタマークは、「近代人類学」の創始者の一人と目されるマリノフスキーの師にあたる人物であるが、進化主義の影響を濃厚に受けていたことから、長期にわたるフィールドワークの実践に基づいた民族誌を刊行するなど、後の人類学者の先駆けとも言える功績を残していたのにも関わらず、後世の人類学において忘れられてしまった人物である。

だが、その民族誌には、その後の人類学中東・イスラーム研究が直面した問題が詰め込まれている。本研究において問題としているフィールドや地域の捉え方とあわせて宗教現象の捉え方の可能性についても明らかにした。

(4) 個という視座

ベルベル系宗教知識人の翻訳活動に伴う知のローカル化という問題を取り扱うのにあたって、本研究では、地域概念の再検討とあわせて、「中東」が、古来より多様な人々が民族、宗教、言語の違いを超えて離合集散と交渉を繰り返してきた巨大な交流圏の一つであることに留意した。この圏域では人名、地名、出来事で満たされたリフラと呼ばれる旅行記が精力的に産出されてきたが、固有名への強い関心は日常生活・会話の中でも広く見受けられ、人々の生活を基礎づける重要な関心の持ち方となっている。このことは、中東を基点として広がる世界において、生身の個人という存在と移動という経験、未知なる人・場・情報との遭遇こそが、世界を形成・構想するうえでの根幹と見なされてきたことを示唆する。

このような関心の持ち方は、地域概念の再検討において参照したムフタル・スースィーの地域の捉え方にも、また今日のスース地方の宗教知識人や現地の人々の地域、歴史、人の捉え方に共通するものである。

この点を踏まえて、中東を一つの基点として活躍する具体的個人に焦点を定めて、彼らの人・場・情報との出会い・交渉・関係の形成はいかにして実現されているのか、超地域的な人・物・知の交流とミクロな生活の場の形成とがどのように連関しているのかを探求することを通じて、個人が織りなす世界の特質を解明しようとするべく、研究を進めた。

(5) 民衆文化論の再検討

アマズィグ運動においては、アマズィグノベルベル人に固有の文化を象徴的に示すものとして、口頭伝承の収集に精力に取り組んで来ている。その流れの中であって、ベルベル系宗教知識人による知の生産は、アマズィ

グ運動においては、アラブ人の影響を排する試みと受け止められ、アマズィグの純粋な文化、伝統文化の形成に寄与したものと受け止められる。

これに対し、本研究では、アラブ/ベルベルなどの民族的差異とあわせて、知識人/民衆といった差異を前提とした議論が、ベルベル系宗教的知識人のテクスト生産とその流通を検討するうえで、実情に必ずしもそぐわないことに留意した。そのため、エリートと民衆の関係を捉えるうえで、人類学のみならず、隣接分野においても用いられて来た「民衆」概念を再検討に付した。

以上の研究成果については、国内における発表のみならず、海外においても、英国に本拠をおき、社会人類学の世界学会である王立人類学協会における研究セミナー、イタリアのナポリ大学で開催された国際シンポジウム、フランス・パリ市に本拠を置く社会科学高等研究院で開催された国際シンポジウムおよびセミナーにおいて発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

齋藤 剛、「聖者、精霊、女性 モロッコにおける廟参詣の一断面」、『季刊民族学』、査読無、149号、2014、54-61

齋藤 剛、「個への視座、個からの視座」、『民博通信』、査読無、152巻、2016、16-17

[学会発表](計12件)

SAITO, Tsuyoshi, “Edward Westermarck (1862-1939), anthropologue de l’Islam marocain,” Séminaire « Parcours anthropologiques dans le monde arabe », 2017年3月30日、パリ(フランス, 社会科学高等研究院)

SAITO, Tsuyoshi, “Réflexions sur la culture populaire dans le Moyen Orient : Perspectives anthropologiques japonaises,” Colloque international: La culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées, 2017年3月27日、パリ(フランス, 社会科学高等研究院)

SAITO, Tsuyoshi, “Recherches japonaises sur le Maroc : itinéraire et perspectives d’enquête,” table ronde « Recherches anthropologiques sur le Maroc : approches croisées (Japon, Pays-Bas, USA, France, Maroc) », 2017年3月24日、パリ(フランス, 社会科学高等研究院)

齋藤 剛、「これまでの研究会の論点の整理」国立民族学博物館共同研究「個-世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」2016年6月4日、国立民族学博物館(大阪府・吹田市)

齋藤 剛、「問題提起 中東における「民衆文化」の編成と「民衆」概念の再検討」人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」キックオフ・国際シンポジウム「中東における「民衆文化」の編成と「民衆」概念の再検討」2016年2月27日、国立民族学博物館(大阪府・吹田市)

齋藤 剛、「個-世界論 問題提起 民衆イスラーム論の陥穽」国立民族学博物館共同研究「個-世界論 中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」2016年1月23日、国立民族学博物館(大阪府・吹田市)

齋藤 剛、「個-世界論 問題提起」国立民族学博物館共同研究「個-世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」2015年10月17日、国立民族学博物館(大阪府・吹田市)

SAITO, Tsuyoshi, “Migration and the Changing Meanings of Homeland among the Moroccan Berbers.” International Workshop on *Mobility, Migration, and Its Discontents*, 2015年9月18日、ナポリ市(イタリア, Università degli Studi di Napoli "L'Orientale")

SAITO, Tsuyoshi, “Blurring Maraboutism: Westermarck and a perspective on religiosity in daily lives,” 2015年3月25日、The RAI Research Seminar, ロンドン(イギリス, The Royal Anthropological Institute)

齋藤 剛、「ムフタル・スーフィーとロベール・モンターニュ モロッコにおける地域をめぐる二つの眼差し」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」2013年11月10日、東京外国語大学本郷サテライト、(東京都・文京区)

齋藤 剛、「モロッコの聖者崇拜と参詣—文化人類学の視点から」日本中東学会第19回公開講演会「参詣と巡礼 - 日本と中東イスラーム世界」2013年10月27日、愛媛大学(愛媛県・松山市)

齋藤 剛、「ベルベル人とイスラーム モロッコにおける「先住民」運動の展開とその宗教観」日本イスラム協会公開講演会「マグレブ・アンダルスの歴史と文化」2013年6月2日、東京外国語大学（東京都・府中市）

〔図書〕(計3件)

齋藤 剛・木村 真希子・深山 直子・丸山 淳子・石垣 直・中田 英樹・水谷 裕佳・小西 公大、昭和堂、『先住民からみる現代世界』、2017年、印刷中（掲載頁調整中）。

齋藤 剛・堀内 正樹・西尾 哲夫・水野 信男・宇野 昌樹・奥野 克己・小田 淳一・新井 和広・大坪 玲子・大川 真由子・錦田 愛子・米山 知子・井家 晴子・池田 昭光、悠書館、『断と続の中東 非境界的世界を遊ぶ』、2015、420（113-149、150-153）。

齋藤 剛・柳橋 博之・吉田 京子・阿久津 正幸・森山 央朗・菅原 睦・小野 仁美・堀井 聡江・佐々木 紳・山崎 和美、東京大学出版会、『イスラーム 知の遺産』、2014、361（297-338）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤剛 (SAITO, Tsuyoshi)
神戸大学・国際文化科学研究科・准教授
研究者番号：90508912

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし ()